

孤雁

〈書き下ろし〉

― 富樫左衛門のこと

うねれる波は人の世なり、波濤は人の一生なり、何をたよりに小舟漕ぐらん

番卒なりし人

「これは流れの者でござります。以前を言えば、加賀の国、安宅の関の番人なりしが、関守の富樫なにがし、留め置くべき判官義経一行を通す大事がございましてな。いかに判官哀れなるとも、任を忘れて情をかける関守とは、ああ、あさましや」

富樫の霊

「わしは情をかけてはおらぬ」

番卒なりし人

「これはこれは富樫さま、とんとご無礼仕る」

富樫の霊

「いまいましき判官ゆえ、目にも見せんと思うていたのだ」

番卒なりし人

「いまいましいとおっしゃるのは」

富樫の霊

「我も昔は加賀のあたりを治むる武士、木曾義仲殿拳兵に従い戦の数々、俱利伽羅峠や加賀越前と進みしが、義仲殿は天下に疎まれ宇治川で義経に敗れたり。我も捕らわれ覚悟の折から、この富樫には鎌倉殿が恩をかけられ命拾うも、さりながら、かの義経に討たれたる一族の者朋輩の無念をいつか晴らさんと、願いが天に通じしか、我が守る安宅の関に義経主従が向かいたるとの知らせあり」

番卒なりし人

「人数風体間違はなく、作り山伏羲経主従、いざいざ詮議」

富樫の霊

「詮議はおろか一人も通すまじ、切り捨てんと、思いは、いきりたち刀。抜きかけて見る一行の、強力こそは彼なりけり。落日の判官は綾菅笠に身を縮めたり。昨日追いしも今日は追わるる、この様見よや、世に謳う盛者必衰これなりと、思えばもはや我が敵ならず、去りし日の我が姿なり」

番卒なりし人

「関守殿はわしが訴えも反故にして、一行を通されけり、そればかりか」

富樫の霊

「行く末を見届けんと、この身を捨てて名を捨てて、墨の衣に世をしのび、墨の衣に世をしのび、みちのくの山また山を踏み越えて、平泉にぞ到りける。ようよう対面なさんとして、判官どの、安宅の関の関守が、出家いたしてこれまで参り候なり、義経どの、お懐かしやと御名を呼び奉れども、判官どのはいらえもされず、まつすぐ奥へ入られたり。

富樫は夢の覚めたる心地して、大いに笑い笑いきて、あるはただ、春の花、夏の草きれ、秋の月、冬曇天どんてんの低き空、群れをはずれし孤雁こがんなるとも、風の時代にすつくと立てよ、風の時代にすつくと立てよ。

番卒なりし人

「そのときの富樫どの、いや出家なされて仏誓ぶつせいどののは、私めには、おさびしゅうげに見えますれば、これをあはれと申すらん、そのお心はいかばかりかと、空のあなたに、いつもたずねておりまする。」